

【第4回】市立学びの多様化学校等のあり方に係る有識者等会議

|              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日 時          | 令和7年3月11日（火）14：00～16：00                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| 場 所          | 名古屋市教育館 第4・5研修室                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 参加者<br>(敬称略) | <ul style="list-style-type: none"> <li>井上 博詞<br/>(所属) 学校法人平島学園こじか幼稚園 園長<br/>元 岐阜市立草潤中学校 校長</li> <li>入江 優子<br/>(所属) 東京学芸大学こどもの学び困難支援センター 准教授</li> <li>武井 敦史<br/>(所属) 静岡大学大学院教育学研究科 教授</li> <li>村中 直人<br/>(所属) 一般社団法人子ども・青少年育成支援協会 代表理事<br/>臨床心理士 公認心理師</li> <li>尾関 利昌<br/>(所属) 名古屋市立小中学校 PTA 協議会 会長</li> <li>山村 伸人<br/>(所属) 名古屋市立富士中学校 校長</li> <li>森 義裕<br/>(所属) 名古屋市立植田北小学校 教諭</li> <li>横井 裕人<br/>(所属) 名古屋市教育委員会事務局 新しい学校づくり推進部長</li> </ul> |
| レジュメ         | <p>1 これまでの議論の振り返り<br/>学びの多様化学校等のあり方に係る有識者等会議のまとめ（案）</p> <p>2 その他<br/>諸連絡</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 記 録          | <p>●議事録について<br/>第三回の議事録について、修正箇所がないことを確認</p> <p>1 これまでの議論の振り返り<br/>まとめ案の「1 有識者等会議設置の背景」～「3 学びの多様化学校について」</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |

■事務局からの説明…資料を基に説明

■委員からのご質問・ご意見

特に無し

**まとめ案「4 本有識者等会議における主な意見」**

**(1)本市の不登校施策における学びの多様化学校の位置付けや意義**

■事務局からの説明…資料を基に説明

■委員からのご質問・ご意見

(森委員)

第三回にて、学びの多様化学校というのは不登校児童生徒を減らすものではなく、あくまでその状態の子どもたちの学びを保障するものということが確認できたと思う。

ただ、不登校施策と記載してしまうと、「不登校児童生徒を減らすための手立て」という印象が現場感では強い。

そのため、学びの多様化学校とは不登校児童生徒を減らすための方策ではなく、そうなっている状態の子どもたちの学びをサポートするためのものということを、教育行政や我々委員だけではなく、現場の教職員・校長・教頭を含め担任レベルの教職員全てが、同じような認識で新たな設置に向けて考えていかないといけない。現場の感覚としては上記の意味合いがあるということを前提に、これから設置していくにあたり情報を発信していく方が良く考えている。

(武井委員)

本日が最終日のため、すでに確定版のひな形が出てきているが、本日出た意見等が反映されているのか確認をする場は設けられるのか。それとも、議事録のような形で修正してその後委員長裁量となるのか。

(清水課長)

本日ご意見いただいたものを事務局側で改めて修正・追加をさせていただき、その後各委員の皆様にもう一度メールにて送付し、ご確認いただいた上で確定させていただきたいと思っている。

(武井委員)

そうであれば、考えていただきたい点がP, 9にあり、先程森委員からも意見があったが、不登校という現象をどう見るのかということに関わっていく。不登校の見方は一つではなく多様な見方が存在するため、その見方に対応して様々な支援のあり方が存在すると考えたときに、P, 9の○3つ目「互いにどのような子どもを支援しようとしているかを理解し、同じ視点に立つ」ということが記載されているが、同じ視点に立つということはやっていることは違えど見方は同じですというように聞こえる。

だが、事の本質を考えると同じ視点に立てるはずが無く、支援しようとする子どもが違っているということは、それに対する現象の見方も変わってくる。見方は変わってくるがそれはバラバラではなく、相互の関係を理解することで、より広い視野から対応することであれば良いと思うが、同じ視点というと「目的を共有化する→共有化された中で方向性がある程度確定する→ダイバーシティが失われていく」ということになりかねないと思うため、その辺の表現を少し工夫していただきたい。

#### **まとめ案「4 本有識者等会議における主な意見」**

##### **(2) 学校の基本的方向性**

##### **ア 目指す学校の姿（コンセプト）**

##### **イ 目指す学校の姿の実現に向けた学校づくりの視点（特色）**

#### **■事務局からの説明…資料を基に説明**

#### **■委員からのご質問・ご意見**

(村中委員)

新しいコンセプトの中の「自律して学び続ける」は、ナゴヤ学びのコンパスの中にも入っていることを確認したが、●2つはナゴヤ学びのコンパスの中に記載されているものではなく、この学校独自のものとして具体化の候補があるという理解で相違はないか。

(清水課長)

●2つもナゴヤ学びのコンパスの考えに基づいた取り組みだが、この学校では特にこの取り組みを大切にしたいということで掲げさせていただいた。

(村中委員)

内容としてナゴヤ学びのコンパスの中に入っており、ここで特に強調して取り上げたということであれば、ナゴヤ学びのコンパスの中のより具体

化された姿の中に、「独自のもの・この学校だからできること・このコンセプトだからコンパスをさらに進められる」というような表現が入ると、より独自の特色が出るのではないのか。

(入江委員)

「自律」という言葉は、自分を律する方の自律と、その上に記載のある社会的「自立」というものが位置付けられており、「自立」は文科省が掲げている「最終的なゴールは社会的な自立」というところだと思うが、ここが書き分けられていて、説明が無いとより理解が難しいなという印象を持った。

これまでの話の中で個人的には、「自律して学び続ける」ということがビジョンであれば、学校のコンセプトとしてはそれがゴールで良いかと思っており、この場で培ったものは将来的に社会的自立へと繋がっていくということ、方向感として持っているとしても矢印として繋ぐというよりは、自律して学び続ける姿というところにゴールのビジョンを置くのもいいかと思う。

また、「自律」と「自立」の言葉の違いについては難しいところだが、この学校で大事にするところとして、●2つを見たときに、自分を律する方の自律というのは最終的に他者と自分との違いがしっかり尊重され、その中で自ら行動していくという意味合いが強いと感じており、その中のプロセスがかなり重視される学校ということではないかと思う。

以上を踏まえた上で考えると、この学校が特に大切にしているステップとしては、自己選択はとても大事であり、一人で学ぶのも仲間と学ぶのも良いが、コンセプトにある「自分なりのチャレンジ」とことが受容されたり、尊重されたり、保障されたり、ということも一つ入っていると、自分も他人もそれぞれのチャレンジに向かって行ける、それが自律して学び続ける姿につながっていくという形が、これまでのお話の中では最適なのではないか。

(横井座長)

本件、「ア 目指す学校の姿 (コンセプト)」を考えるにあたり、コンパスをどうすみ分けをするのか、コンパスそのままでいいのか等で様々な議論はあったが、コンパスはゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける、という言葉を使っている、上の自立は大人として、下の自律はそこに向かってスパイラルのように自律して学んでいく、という意味で表現をしたが、ご指摘いただいた通り近くに記載されている、「自律」と「自立」という字があるということは考え直した方がいいと思う。

(入江委員)

自律して学び続けることが繰り返されて、社会的自立に繋がるというプロセスもあると思うが、特にこの学校で重視したい力となると、自律して学び続けるために、様々なスモールステップがあるのではないかという意味で、自律して学び続ける姿がゴールとしてある方が良いと思った。

(井上委員)

思ったことは2点あり、1点目はP, 13の「目指す学校の姿の実現に向けた学校づくりの視点」の表の中で、「まざる：多様な人とまざりながら学び合うことを大切にします」というのはとても素敵な表現であり大賛成だが、P, 12の○一つ目「地域の人とまざることは大切」という表現に対して、地域の人とまざることも大切だが、地域の人とまざることも含めて、多様な人とまざる・関わることを大事にするということで、表現を幅広くした方がP, 13の「まざる」へ繋がると思う。

また、P, 13の「まざる」の●一つ目にある「地域・民間団体・大学などと連携した体験活動・キャリア教育」というのはすでに具体的に何か考えたイメージがある段階なのかをもう少し知りたい。例えば、企業や職場体験でいろいろなところに訪問し、人とまざるという視点があっても良いと思った。

2点目は、P, 13の「あんしん」の●二つ目「子どもが自分なりにチャレンジできる場と、安心して失敗できる環境の設定」について、失敗するというのをどのように捉えて見えるのかと感じた。私は、すべてのことは失敗ではなく、何かへチャレンジして途中でやめたとしても失敗と捉えたくはないと思っており、やろうと思ったこと自体に大きな意味があり、立ち止まることも大きな意味がある。

失敗の中身は、立ち止まること・一旦やめることを失敗として表現するのではなく、立ち止まることもあって良く、やり直す、道を修正するということがあったり、自分の目標を見直して変えることなどを、安心してできるような表現や考え方になってほしいと思った。

(尾関委員)

先日、星槎名古屋中学校の校長先生とお話しする機会があり、まさに先程井上委員がおっしゃられた「まざる」というところで、星槎名古屋中学校の野球部の生徒が自校だけではなく試合にならないが、中村区内のある中学校の野球部と合同チームを作り、試合に出場したとのことだった。他の学校の生徒と混ざるとは苦手なのではないかと思ったが、実際は試合ができたとのことで、自校で練習するとなかなか野球にならなかつ

た様だが、合同チームで出場したところ支障なく試合ができ、生徒もとても喜んで帰ってきて「次も行きたい！」と言っていたそうである。

上記のことから、これからの名古屋市の中学校の部活動がどうなっていくのかはわからないが、例として他の部活動の競技でいうと、森委員とハンドボールの会場でよくお会いするが、現在のハンドボールの試合は単独チームよりも合同チームで出場する学校が多くあり、部活動による交流や合同チームでの大会出場により試合を経験することで、他校の生徒と「まざる」ということも入れていただけるとより良いかと思う。

(清水課長)

先程、井上委員からご質問をいただいた、地域・民間団体・大学などと連携した体験活動・キャリア教育の想定はあるのかというところについて、前河村市長が強く推進していたため、今年度からキャリア教育に力を入れており、キャリアタイムサポーターという民間企業・団体や大学の方に希望を募り参加していただいている。また、その団体はキャリア教育推進センターへ登録してもらい、そのセンターを通じて各学校がキャリア教育で取り組みたいことの相談やコーディネートをしている。

こうした強みを、名古屋市ならではの取り組みとして、学びの多様化学校で推進していきたいと考えている。

(山村委員)

P, 13の「目指す学校の姿の実現に向けた学校づくりの視点」の「ひたる」という点について、学びや活動にじっくりと、時間的保障というニュアンスが色濃く出ている。今回の学びの多様化学校については、「きめる」というところでそれぞれの子どものペース・学習内容などの、その子に合った形で柔軟に対応するということが出ている。

そのため、「ひたる」の時間的保障については、学校は慌ただしく毎日様々なことに追われており、決められたカリキュラムを1015時間の中に納めなければならないが、子どもたちの時間的保障もするというニュアンスがここで伝わると、探究活動だけでなく、時間についても柔軟に保障していくということが表現できるとよいと思う。

(入江委員)

P, 13の「目指す学校の姿の実現に向けた学校づくりの視点」の「ききあう」という点について、●二つ目の「大人が子どもと対話し」というように記載されているが、大人が主となって子どもと対話し尊重するというよりは、「大人と子どもが対話し」とし、子どもが大人に関心を持って対話し

ていくことや、一緒につくる対話というような表現に変更した方が趣旨に合うのではないか。

(村中委員)

2点あり、1点目は先程井上委員がおっしゃられた失敗について、私は「試行錯誤」という言葉が好きで、安心して試行錯誤ができる環境というのが趣旨に合うのではないのかと感じた。

2点目は、「きめる」の●一つ目「子ども一人ひとりに合ったペースや方法で学ぶ」とあり、もちろん大事なことはあるが、出来ればもう一步踏み込んで内容や何を学ぶのかというところも、子どもたち自身が考えて決めていけるという内容を、より明確に表現した方がいいのではないか。

また、自身が先程質問した「自律して学び続ける」のところの「興味・関心があることや、学ぶ必要があると考えたことを自己選択・自己決定する」と書いてあり、これは明らかに自分で決める内容となっているが、「きめる」についてはペースや方法しか選べないという齟齬が出てきてしまうため、「きめる」の方でも何を学ぶのかというところで選択の幅はあり、子どもたち自身で決めていけるという表現の方がいいのではないか。

(横井座長)

P, 11の「目指す子ども像（ビジョン）」が今回新たに提案され、「自分らしくいられる環境で、お互いの存在を認め合いながら、自分なりにチャレンジし、自律して学び続ける」というのが自身としては、良い表現だという風に感じているが、どうか。

(村中委員)

「目指す子ども像（ビジョン）」について、「お互いの存在を認め合い」というところは「尊重し合い」と「認め合い」のどちらが良いのか、意見を出すところまでは辿り着いていないが、表現としてどちらが適しているのだろうと感じた。

(山村委員)

P, 10とP, 11に記載されているクローバーの、「ききあう・まざる・きめる・ひたる」の記載順が変更されているが、意味があれば教えていただきたい。

(清水課長・横井座長)

P, 11のコンセプト案を試行錯誤している中で順番が変わってきたものの、「ききあう・まざる」については社会性を育てるもの、「きめる・ひた

る」は学びについてという整理をし、図として分けて記載をしようという経緯があった。

現状の整理で言うと、P, 10の図は上下で分けており、P, 11の図の方は左側を社会性、右側を学びとして左右で整理した方が良いのではないかといいことで入れ替わっている。

(山村委員)

順序性があるわけではなく、単に分類の仕方を縦から横へ変更したということが分かった。

(清水課長)

当初は、左側が社会で右側が学びという風に分けようと考えていたが、すべてが関わってくるということもあり、左右で分けることが出来なかったため、特に順序性も現在はない。

(武井委員)

P, 11の「目指す子ども像（ビジョン）」が今回新たに提案され、「自分らしくいられる環境で、お互いの存在を認め合いながら、自分なりにチャレンジし、自律して学び続ける」というところで、その下のクローバーと照らし合わせたときに、

「自分らしくいられる環境＝あんしん」

「お互いの存在を認め合う＝ききあう」

「自分なりにチャレンジ＝きめる」

「自律して学び続ける＝ひたる」

にそれぞれ相当するのではないかと整理できるのか、してはならないのか、そうであれば「まざる」の部分はどこに含まれているのか。

そのためもう一つ、「自分らしくいられる環境で多様な学びの機会から」というような言葉があると、整理がしやすくなると感じたためその点について教えていただきたい。

(清水課長)

その点については、先程説明を省いてしまったが、「自分らしくいられる環境」の後に、隠れている言葉として「(多様な人と関わり合い) お互いの存在を認め合いながら」という思いを込めて「お互いの存在を認め合いながら」というのを記載させていただいたため、「ききあう・まざる」というのは「お互いの存在を認め合いながら」というところに込めさせていただいた。

そして、「自分なりにチャレンジし、自律して学び続ける」というのは、先程武井委員の方からもありました通り、「きめる・ひたる」に関わってくるのではないかと考えさせていただいた。

(横井座長)

当初の提案では、クローバーの上にキャッチフレーズのようなものがあり、それをまとめてコンセプトと言っていたが、コンセプトとビジョンを分けて整理していくということになり、ビジョンを目指すためにコンセプトをアプローチとしてそこにめがけていくというように考えた。一つずつ対応するように整理した方が良いのか、まとめた方が良いのか、武井委員がおっしゃるとおり考え方があると思うので、整理が必要であると感じた。

## **まとめ案「4 本有識者等会議における主な意見」**

### **(3) 学校の枠組み**

**ア 対象となる児童生徒の範囲**

**イ 対象学年、学級数、転入学の時期**

■事務局からの説明…資料を基に説明

■委員からのご質問・ご意見

(武井委員)

場所や校舎の規模感が不明な中で、転入学や児童生徒の範囲についての議論は非常に難しいと感じる。

そのため、対象学年や転入学の時期等に関しては、学校の具体的な規模感や設置場所を勘案した後の段階で、議論すべきということの一部を入れておくべきだと思う。

現在のように具体的なイメージが無く、空想でこれはこうあるべきだという議論をすることは机上の空論になってしまう。

ただ、考え方としては不登校の情勢・増え方・進路が問題となる状況や、保護者の方がどこまでどう通えるかというような状況等の、さまざまな複合要因があるため挙げておくことは問題ないが、学校についてわかりもしない段階で決めてしまうと、知りもせずにそのようなことを決めてしまうのかということに当然なりかねないため、抑制的である必要があるかと思う。

(清水課長)

ご指摘を追記させていただく。

(入江委員)

議題に対する意見というよりは、先程の武井委員のお話に関連するところで、来年度はどのような内容を検討するのかという点をもう少し詳しく教えていただけると、意見が出しやすくなると思う。

今後、もう少し具体化していく中で現状出ている内容としては、対象学年・学級数・転入学の時期だが、例えば学級数のところでいうとどれくらいの人数を想定するのかだとか、ここに入っていないことで言うと、現在までに出ているコンセプトを実現するような教育実践の中身・人材・部屋、また「あんしん」で言うと名古屋市が中学校全校でつくられている校内居場所のようなものをつくるのか、そこにはどのような方々がいて、どのように受け止めるのか、少人数というのはどれくらいの規模を指しているのか、という具体的な内容がコンセプトを実現する上で検討されているが、その内容と深く関わってくる問題になるかと思う。

そのため、以上の内容を来年はじっくり検討するとのことであれば、出来る限り来年に持ち越した方が良い事柄であり、今後のプロセスを教えてくださいと考えると考えやすいのではないかと。

(横井座長)

そうすると、次のP. 16の設置のあり方も関連してくると思われるので、その説明も事務局にお願いしたい。

## **まとめ案「4 本有識者等会議における主な意見」**

### **(4) 設置のあり方**

■事務局からの説明…資料を基に説明

■委員からのご質問・ご意見

(武井委員)

全国の学びの多様化学校を見てみると、私学はともかく大体の公立が廃校の跡地を活用しているパターンが多いため、おのずとそうなるであろうと思う。

また、設置のあり方について、今後学校をデザインしていくにあたり重要となる点については「定着」であり、教職員・児童のどちらも一回入るとその場が安心してそこが居場所という形で、永続的な居場所として中学三年生まで上がることを目指すのか、教員についても一度赴任すると、一定程度の期間は根を下ろすようなデザインにするのか、それとも学びの多様化学校であるが故に入ってきて出ていくことも歓迎するのか、この学校に在る間は指定された教育をし、ルールを守っていただく必要はあるが、

それを経て他校へ行くことも同時に歓迎するのかというところで一つ分かれるかと思う。

もう一つは教員側についても、学びの多様化学校への勤務を希望する方に手を挙げていただき、フリーエージェントのように教員を集めている県もあれば、異動の中に組み込んである一定数の教員がランダムで体験できるようにしていくのか、そのあたりのイメージをどのように置くかによって、学校のつくりや文化が変わってくるのではないかと思う。

また、設置場所が不明な段階で意見を言うつもりはないが、次年度以降は具体的なイメージができた段階で、それを論点として検討することが必要であると思う。

(入江委員)

多くの自治体などが、学びの多様化学校をつくる際に設置準備室のようなものを設置するかと思うが、そこで検討すべき事項のように整理しなくても良いのか、この会議でどこまで決めて、どこを送るのかという点が、もう少しはっきりしている方が意見も出しやすくなると思う。

あくまで、P, 14以降については設置準備室で決めていくが、懸念点や特に議論しなければならない事柄として、この会議の報告をしていくということであれば整理はしやすくなり、現時点では単なる意見としてお話しできるのではないかと思う。

(清水課長)

曖昧な条件の中で、皆様いろいろなご意見をいただき本当にありがたい。只今、名古屋市の議会で予算審議が始まっているので、現時点では確定的なことはお話しできず大変恐縮ではあるが、自身の希望のようなものも踏まえた上でお話しさせていただく。

今回、皆様からご意見いただきまとめた有識者会議のまとめについては、来年度以降の学びの多様化学校の設置ということが関係者各位・議会・地域等を含めて調整ができれば、設置に関しての基本的な考え方を取りまとめていきたいと考えている。

その際には、有識者会議にていただいたご意見を参考に、本市としての考え方をまとめてまいりたい。

また、この有識者会議のまとめについては、年度末を目途に市の公式webサイト等へ公表する予定だが、会議についてのまとめを踏まえて来年度の本市の学びの多様化学校の基本方針へ繋げられたらと考えている。

本市としても、出来る限り早い段階で令和7年度の市の考え方について、お示しできると良いかと思う。

実際に設置するということが決まり次第、実際に設置候補となる場所の地域の方々に対して、丁寧に趣旨をご説明したうえでご理解いただく必要があるため、その点で設置場所については今年度の段階で特定して申し上げることができかねてしまい、大変申し訳ない。

(横井座長)

不明確な点について、はっきりと回答ができない点につきましてはご理解いただけますと幸だが、P, 16の内容や事務局からの説明を通じてどのような学校なのかをイメージしていただけると幸いである。

(清水課長)

来年度設置するということで、本市としての考えをお示しできるとすると、今回の有識者会議のまとめなり、先程のコンセプト・特色を踏まえて、学校での具体的な教育課程・取り組みというものを検討していきたいと思う。

(畑生課長)

位置づけとしては、先程武井委員・入江委員がおっしゃられたとおり、具体的には来年度、教育委員会の方で計画を立てさせていただくという前提でご意見をいただいた、というような形になるかと思っており、それを文言として追加するのかについては事務局の方で検討させていただく。

(井上委員)

武井委員・入江委員がおっしゃられたとおりで自身も感じたことは、ここで決まった・確認されたことは今の名古屋市にとって学びの多様化学校は絶対に必要であるということが一番であり、この会議で議論されたコンセプトや考え方を大事にし、今後具体的なあり方を検討していくべきであるということをこの場で確認した、というのがこの会の位置付けとなる。

今後に関して、いろいろな意見はあったがそれらをさらにできる限り踏まえて、設置準備室になるのかはわからないが、今後の具体的な案を検討していくことを期待するというのが、この会の最後の出口になるのではないかと思う。

岐阜市の場合は、とにかくスピード感を持ってやろうという部分があったため、準備期間は一年間しかなくいろいろな方々からの意見を聞く場もその一年の前半に設けられた状態で、かつコロナ禍の一番メインの年であったため、なかなか集まっていたくことも難しい状況の中でスタートをしたが、いろいろなアドバイザーの方から意見をいただいた際に、様々な意見がありすべてを聞き受けることもできなかった。

ここで出た意見というのはすべてに意義があり、視野が広がるご意見だったのではないかと思います。それを踏まえた上で、来年度以降の設置準備室でより具体的に、計画を進めていくことを、切に期待をするといった出口で締めることも一つであると感じた。

## ○全体を通しての質疑・意見

(武井委員)

時期的に言うと2024年12月に、次の学習指導要領に関する諮問が出ており、教員のあり方や教育課程のあり方も弾力化していく方向性としてははっきりと出ている。

こちらに関しては、答申を待つまでもなく方向性も出るであろうと、それがどの程度・どこまでできるようになるのかということは、これからの議論によるとしても、その前提を置いたときに学びの多様化学校というものの可能性としては、そこでやられている教育課程そのものが他の学校ですべてできるとは思わないし、学力テストやペーパーテストで計られる点数から言うと、恐らく他の学校の平均には及ばないという可能性もあるが、そのダイバーシティという観点や教育課程を自分たちでつくってみるという観点に対しては、他の学校のパイロット的な役割を担うことができるはずである。これは単なる不登校施策に特化してその対応をするということに限定した機能として考えるのではなく、新しい教育をつくるための一つのパイロット校であるというような位置付けを、ある程度出しておいただ方が良いのではないかと思います。

もう1点は、恐らく今後の議論というのは固有名詞が具体的に出てきて、議会や財政当局とのやり取りが必要となってくるため、もう少しリアリスティックな議論をしていかなければならないのではないかと思います。その際に優先して考えなければならないことは、理念を大切にすることというのは大事だが、ここで出てきた理論は相当に幅があり、その平均を取るような議論をしてしまうとあまり良い方向へは進まないのではないかと思います。

そのため、ここで検討されたことを一度腹の中に落とし込んだ後に、柔軟に考えていく方が自身の経験上として上手くいくのではないかと思います。おり、恐らく玉虫色でいろいろなものを混ぜたような学校にしてしまうと、どっちつかずになってしまいそうした形ではあまり上手くいかないのではないかと感じたため、文面ではなく一感想として述べるのであれば以上の内容があり得るのではないかと考えた。

(村中委員)

シンプルな疑問だが、冒頭に森委員から不登校施策という言葉を使ってしまうと、「既存の学校システムの中からこぼれ落ちてしまう子どもたち

を、減らしていく仕組み・取り組み」なのではないかというイメージが教員の方からは強く、コミュニケーションに注意をしなければならないという発言がありとても納得した。

では、今ここで作ろうとしているものを何と言え伝わるのかという点がとても疑問であり、自身の表現で言うと「既存の学校システムに合わなかった子どもたちと一緒に、新しい教育のプロトタイプやチャレンジをしていく施策」だということを、一言で齟齬が無いよう教員の方にも伝わるような言葉はどこにあるのかということ、現状自身としてアイデアがあるわけではないが、そのような言葉が見つかる武井先生がおっしゃられたようなことも含めて、名古屋市として考えていることやチャレンジしていることが伝わりやすくなるのではないかと思います。

(山村委員)

現状、私が在籍する中学校では、不登校となる原因は様々なため、それぞれに合った対応を学校としては居場所ができてから、少しは柔軟に対応ができるようになったが、学習指導要領の心配等があったり、履修漏れを一番に防がなければならないこと、定数等の縛りなどがある中で精一杯やれることは頑張っているがどうしても限界はあるため、この学びの多様化学校が子どもたち一人ひとりに応じ、これができたらいいのではないかというカリキュラム・時間数・環境整備等をオーダーメイドでやっていただくと良いのではないかと。

それが、通常の学校に戻ってくるときに、教育諸条件や一律の35人や40人学級で良いのかなどという議論にも発展し、いかに子どもたちの実態に応じた子どもたちを中心とした教育課程が組めるのか、学校ごとでどれだけ迫ることができるのかというところに対して、夢があり、自身・現場としての思いを乗せて変えていきたいということのきっかけになれば、現場が元気になるようなものになれば良いと思う。

(入江委員)

本日、名古屋市の中学校を回らせていただいて校内居場所を拝見したが、既存の学校や地域の学校と言われるところも、今は変化の途上にあるということをしっかり踏まえておいた方が良いと感じた。

本日訪問した学校や、以前訪問した学校の校内の居場所に担当の先生がいらして、ゆるやかな時間割があり、○曜日の○時限目には各教科の先生が来るなどの学びタイムもあれば、リラックススペースもあり、その先生が来た時にその教科の学習をしたい子がいればできるが、別のことをやっても良いなどの、かなり柔軟な運用がされており、担任の先生も必ず1

回はいらしてくださったりして情報共有等もしっかりされており、そのように中学校の方も変化してきている。

また、ソファで寝ていてもいいなどの自由な部分を教員としては葛藤があるのではないかと思ったが、かなり教員側のマインドも柔軟になってきているということが感じられるお話が多くあった。

そう考えると、冒頭で森委員がおっしゃられた不登校施策における、と記載のあるところで、不登校の子を限定して対象像を決めてその子のための支援というよりは、学校全体も変わり、学びのあり方も変わっていく流れの中にいろいろな取り組みがあるというメッセージはしっかりと出した方が、名古屋市の今の流れに合っているのではないかと思う。

以上のことを考えていくと、今は学びの多様化学校の目指す学校像がP, 10～11で記載されているが、ここに示されている学校の基本的な姿、基本的な機能は、もしかすると不登校の子どもたちを含めて支援してく学校の姿として大事にされるべき共通のコンセプトになるのではないかと思う。それを実現する際に学びの多様化学校なのか通常の地域の学校なのか、その実践のあり方が様々な制約や学校の作られ方で違ってくると思うが、連続性を持たせることの重要性を、設置準備室に送るということも大事になってくるのではないか。

その上で、この報告書の構成を見てみると一番最初に位置付けや意義があるが、この会議が最終的にどのような意義があるのかということで締めくくべきではないかと思った。

例えば、冒頭で森委員がおっしゃられた「不登校施策における」というのがかなり全面的に出ているが、どちらかというとP, 10以降のようなコンセプトを実現することがいま学校に求められており、そのために学びの多様化学校というものが一つの先導役として必要であり、だからこそ意義のある、という書かれ方が方が有識者会議として申し送るには意義があると思った。

また、P, 14以降の枠組みについては、それを実現していく枠組みを具体的なビジョンが見えてから検討したらいいことであり、参考的に示すことも良いかと思う。が大きな枠組みとして、小や中なのか児童生徒の範囲については通常の地域の学校との違いという意味で記載していることについては、確かに意見が出ているので記載することについては良いと思う。また、最後のP, 16の「設置のあり方」については、少し内容に対して表現が大きいのではないかと思う。設置数等に関して述べている文脈のため、少し表現を狭めることで、とP, 14以降は具体的な枠組みの話で整理できるかと思う。

これほど組み替えられないかもしれないが、学びの多様化を実現していく上でのコンセプトが先にきて、そのための意義と具体的な検討事項が記載

された報告書の流れになっていると、メッセージとして伝えやすいのではないか。

## ○ 最後のあいさつ

(井上委員)

名古屋市が慎重にこの計画を進めているということを、進行されるにあたり常に感じていた。横井座長にはご苦労をおかけし、ここで自身はある意味勝手な意見ばかり述べさせていただいたが、今後それがどのように具現化されていくのかが非常に楽しみである。

岐阜市立草潤中学校を開校する際に、大変お世話になった京都大学の塩瀬先生が、開校直前の3月末に行った内覧会にて、本当に感動的なスピーチをしていただいたのだが、その中の一つに「この学校は義務教育に一石を投じる学校になる」と言っていたことは、今でもよく覚えている。

名古屋市がいま考えているこのシステム・学校、こういったものはきっとこの学校だけに限らず、名古屋市の教育全部に大きな一石を投じることになるのではないかと期待している。

(入江委員)

先程ほとんどお話してしまっただが、関わらせていただいて2年目となり昨年から調査の方へも参加させていただき、名古屋市の本当に大きな特徴としてこの学びの多様化学校だけをつくるということではなく、むしろ地域の学校の改革を先導しながら学びのコンパスがあり、居場所づくりもあり、その流れの中で学びの多様化学校がある。だからこそより現実的な理論が必要で夢物語を描くわけではないところに難しさもあるのかもしれないが、井上委員もおっしゃられたように子どもたちの学びの多様化だけでなく、学校のあり方みたいなのところへ全面的に挑戦し、いろいろな角度からそういった実践がたくさんある名古屋市であるので、その中で拠点校や先導的な役割を担う学校は、どのような学校になるのだろうかということが求められているのだと思う。

また、例えば小学生の不登校が現在は本当に増加し、調査結果で見ると小学校1～2年生の率がとても増えており、これまでの不登校のイメージと随分変わってきているという印象がある。この学校をつくる頃には、どのように変化しているのかということがかかなり流動的であり、名古屋市の校内居場所などの取組が浸透することで、通常の学校のあり方がどんどん変化し、その中でできていくということがあるため、もし設置準備室ができた暁には、そのあたりをかなり柔軟に見ながら、この学校のあり方を検

討していくことになるだろうと思い、その難しさとともに期待がかなり高まるところある。

ぜひ、研究という形で携わらせていただきたいというところと、すばらしい学校づくりが進んでいくことを期待している。

(武井委員)

この一年間を通して、大方まとまりの良い会だったと思っているが、恐らくこの会の中での意見の標準的な捉え方と、学校現場等の標準的な捉え方との間には相当距離があるのではないかと想像している。

自身が不登校という現象をどのように見ているかということ、非常に問題はシンプルで子どもや保護者等を見れば、紛れもなくその状態の中で悩んでいる子は非常に多く、心配をしている子も多くいるが、社会の変化を見ていくと増えて当然だと思う。

なぜかということ、児童生徒や社会の側は非常に多様化しており、一方が多様化しているのに対して、学校のシステム自体は明治時代以降、基本的には一つのシステムの中で動かしている。

そのため、一つのシステムが多様化した対象に対して対応しようとする、その中でこぼれ落ちる対象が増えていくことは当たり前で、これについては距離があることも不登校が増えていくことも当たり前のことであるという視点は、15年ほど前から自身で思っており、当時は少数派の見方だったものが現在かなり市民権を得てきたのだという風に見ている。

そうした中で、学びの多様化学校というのは、間違いなく一石を投じることになると思うが、その一石というのをどのように考えるのかということを検討していただきたいと思う。

例えると、完全に冷え切った風呂の水の中に、バケツ一杯のお湯を投じた時、ちょうどいい温度のお湯を投じたとしても恐らくほとんど変わらないが、煮えたぎったお湯を入れるとやっと少しぬるま湯になり冷たさが和らいでくるかと思う。

恐らく、この学びの多様化学校についても同じような意味合いがあり、普通の学校に似ているがやや不登校の児童生徒に寄り添うという学校を作ったとしても、それは一石を投じるという意味は非常に少なく、ついていけないから補完しますというような意味合いになるかと思うが、期待したいところは今までの学校とは似ても似つかないような学校だが公教育という中で、学校の先生方が異動を繰り返していく中で、学校というもののコンセプトを柔軟化して見ていき、既に諸外国では日本のようなシステムを採用している国は先進国の中では非常に少ないため、やっとそれで少しは変わっていくのではないかと考えている。

設置準備室ができた段階で事務局の方に非常にストレスがかかるのではないかと、また、議会や場合によっては地域からもいろいろな批判を受けるのではないかという風に思うが、それは受けて当然と思うことが良いのではないかと思う。他の県でも、多くはそのようなバッシングを受けながら進めていると思うが、それがどういうところに着地するのかというところが、子どもたちに対して誠実であってほしいと考える。

(村中委員)

まずは、この場に有識者という立場で参加させていただいたことを非常に嬉しく思っている。また、それぞれ立場・経歴が全く違うが、根本のところでもとても通じ合うところがあり、一番大事なところで意見がぶつかるところが本当に少ないというか自身の記憶ではほぼ無かったのではないかと考えており、参加させていただくことが毎回楽しみになるととてもありがたい場であり、参加させていただき嬉しく思っている。

自身を振り返ると、原点は恐らく15年前に大阪で小さな私塾家庭教師の事業を開き、そこで多様な子どもたちと出会ったということが原点である。私たちは事業を立ち上げた段階で、恐らく利用するのは不登校の子どもたちがとても多いだろうと思っていたが、蓋を開けてみると違い、ほとんどが学校へ行きながらも深刻な学びの不適応を抱えている子どもたちを、常にずっと見てきた。

それが15年前からなので、今の社会の場の仕組みの多様性や人間そのものが持っている多様性と教育システムの多様性が合わなくなってきているということを15年間ずっと感じながら仕事をしており、ここ数年でお話しさせていただくことにとっても通じることが増え、ご理解いただける機会がとても増えたと実感している。

思いとしては、名古屋市の力になりたいと思いこの場に座っている訳ですが、上位の概念としてこの国の教育という物自体がもう少し多様化し、今ある一本の正解に次の一本の正解が見つかるというイメージではなく、その正解が多様化し分岐することで子どもたちがそれぞれの正解を選ぶような転換が望まれるのであらうと思っており、その中で自身も教育関連の方と交流がありお話しも聞くが、学びの多様化学校という施策自体がかなり重要な位置付けとなり、後で振り返った時に「あれがあったから日本の教育は変わった」と言える施策になり得る、国としてとても重要な施策なのではないかと思っている。

その期待というところで満を持して、名古屋市は本丸をストレートで投げ込んでいくという、そういった学校になると良いなとワクワクしておりますし、これから先、批判や人間は基本的に変わることを嫌うため、変化

へ対する抵抗というのは本質的なものであればあるほどとても強くなると思うが、そこに負けずに実現していただきたいと思う。

また、委員は終了となりますができることはなんでもさせていただきたいと思っているので、何かありましたらお声がけいただきたい。

(尾関委員)

名古屋市の子どもたちのために、お忙しい中議論をしていただき本当に名古屋の子どもたちは幸せである。

現在、PTAは退会や休会等の問題によりマイナスイメージが多いが、新しくできる学びの多様化学校でも是非PTAの組織を作っていただき、名古屋はPTAバレーボールという素晴らしい大会もあるため、学びの多様化学校のPTAの方々にもぜひバレーボール大会に参加していただき、全国大会や東海北陸ブロックの研究大会等で学びの多様化学校のPTAの方が名古屋の代表として実践発表していただけるような日が来ると良いなと思っている。

そのためには、学びの多様化学校ができるまでに今のPTAがしっかりと手を繋いで、協力して繋がりをもっていなければならないと思うので、PTAの代表として、繋がりをしっかり持てるように頑張っていきたいと思う。

(山村委員)

この会議に参加させていただき、非常に学びの多い会議であったため自身としてはとても有意義な時間となった。

本校で居場所ができた時は正直なところ、子どもを甘やかすことになるのではないかという反対の声が多くあり、それにより他の子に影響が出てしまうのではないかという心配の声がかなり上がった。

実際に居場所をつくった際、教室に無理やり入れることなども無かったのだが、6月から入った児童が夏休みを過ぎたタイミングで自ら「僕教室に入ろうかな」と言い、教室に入って合唱祭にも参加し高校受験もパスし卒業し、卒業式の際に保護者の方が、泣いて主任さんの方にお礼を言いに来てくださり、子どもが変わってく姿を職員が見て大きく意識が変わってきた。子どもたちが変わっていくその成長の姿を、教員が目当たりにすると心は動かされるため、この学びの多様化学校についてもこれから具体的なコンセプトで議論に入っていくかと思うが、子どもがここで変わって大きく成長したり何かを乗り越えるということは、教員の方でも手応えがあると必ず意識は大きく変わると思う。

恐らく、研修のみではなかなか意識は変わらないと思うので、一番変わるのとは子どもの変化や成長を目当たりにしたときに、現場の教員の心の揺さぶられ方というのは大きいと感じており、それが現場の意識改革にとって一番大事であるということに改めて思った。

自校はこれで3年目となりますが、もともと居場所について反対していた職員が、「うちのクラスのあの子にとっては本当に居場所があってこそあの子が救われて、卒業式も壇上で証書を受け取ることができました」と話しており、時間はかかったが、やはり自分の目の前にいる子どもがそれで変わっていったことで、職員の意識も変わってきた。

何度も申し上げるが、「対応した結果、子どもが変わるということが一番の意識改革に繋がっていく」と思うので、このコンセプトが子どもたち・教職員にきちんと理解され、お互いが子どもたちの成長のために繋げていき、子どもの姿を通していい形になって自然とロコミ等で広がっていくのではないかと考えている。

(森委員)

私自身、とても学びの多い4回の会議であったという風に感じている。

この会議の議論がとても難しくなってしまった原因は、学びの多様化学校という名前を突き詰めていくと不登校に特化する必要はないという考えであるが、やはり、国の対象児童生徒の範囲が不登校状態である生徒や、不登校傾向がみられる児童生徒という風に限定されている事実であり現実を考えると、不登校施策のどの部分への位置付けかということにこだわりを持ち、この会議に参加させていただいた。

そのため、不登校児童に特化しない学びの多様化学校を、すべての子どもたちがそうなることが理想ではあるが、その現実とのギャップをどのように捉えていくのかというところが次年度以降の議論で必要となるのではないかと感じている。

そのため、次年度以降でこの名古屋市における学びの多様化学校というものが、その枠を超えてつくるところまで進めるのか、もしくはその範囲の中でできることで最大限の結果を出すのか、という名古屋市の学びの多様化学校としての位置付けをしっかりとしていかなければ、議論が全く進まないという風に思ったため、前回からこだわってきた「これは不登校を減らすための学校なのか、それとも不登校になってしまった子の学びを保障するための学校なのか」を名古屋市としての形をしっかりと教育委員会に示していただいて、次年度以降も議論を進めていただけると良いと思っている。とても良い学校ができると期待をしているので、是非一人でも多くの子どもたちが笑顔になれるような学校ができるといいと思う。

(横井委員長)

皆様から積極的にご意見をいただき、非常に有意義な実のある4回の会議を終えられたかと思う。先程森委員がおっしゃられたように、不登校特例校からの学びの多様化学校で、その学びの多様化学校等のあり方に係る

有識者等会議であるが、皆様からいろいろなご意見・考えをお聞きし、会を重ねるごとに学びの多様化学校という特別なものはもう存在すべきでなく、これが当たり前でどの学校でも当たり前となる姿が、皆様からいただいた姿なのではないかと思う。つくづく思っている。

簡単な話ではないが、すべての大人がその子ども観というものを変えながら、多様性という言葉も必要のない世の中になると良いと思う。また、とても広い考えを自分なりに持てていることを嬉しく思っているが、そんな日本の世の中になっていくといいと思っている。

(清水課長)

本日は改めて貴重なご意見をいただきましたので、出来る限り分かりやすく、そして次年度以降検討に繋げられるよう考えている。

今回いただきましたご意見も踏まえた上で、有識者会議のまとめを修正させていただき今回の議事録とともに、これまでと同様に後日メールにて委員の皆様へ送付させていただく。

また、これまでご確認いただいております、1～3回目の会議の議事録の方もまとめ案の作成後、併せて名古屋市の公式webサイトへ3月中を目途に掲載したいと思っているので、これまでご確認いただいたものも併せて、再度ご確認いただくようお願いしたい。

(畑生課長)

4回にわたり活発なご意見をいただき本当に感謝したい。委員の方々のお話をお伺いしていく中で、行政だとどうしても学びは学び、不登校施策は不登校施策というように考えてしまう部分があり、本市でもナゴヤ学びのコンパスやNagoya HEART Planというところで、一つの取りまとめを目指してはいるが、学校のあり方というところを考えた時に同じ問題であり課題であることを強く感じた。

Nagoya HEART Planの中でも、子どもたちが行きたくなるような学校づくりや多様な教育機会の確保、保護者支援や専門機関等との連携というところで3つの柱を立てているものの、多様化学校はこの中で言うと多様な教育機会の確保に位置付けられる施策ではあるが、実際にこの3つの柱すべてを具現化していくようなものにしていかなければならないと感じている。そういった意味でも、すべての意見に意義があるというお話もあったが、多様化学校だけでなく今回の有識者会議でいただいた、不登校や学びに対するご意見も含めて大いに参考にさせていただきたいと思っている。

事務局としては、今年度中に策定を目指しているNagoya HEART Planを着実に実施していくというところと、先程武井委員から次期学習指導要領改訂のお話もあり、予算事項ではあるが学びの方でも柔軟な教育課程の検討

|     |                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | <p>など、様々な形で新しいチャレンジや子ども中心の学びというところを不登校の児童生徒も含め、すべての子どもたちに保障していけるよう市全体として取り組んでまいりたいと思っている。</p> <p>学びの多様化学校につきましては本日ご意見もいただいております通り、まだまだこれから一つ一つ丁寧に調整をしていながら進めていくような段階のため、来年度も引き続き様々な形でご助言やご支援、ご協力を賜れればと思っている。また、期待の言葉もたくさんいただいたので、その期待に応え、ものにしていけるよう事務局一丸となって取り組んでまいりたい。</p> |
| その他 | 特になし                                                                                                                                                                                                                                                                        |